

むかしの霞ヶ浦

年 組 番
名前



霞ヶ浦周辺の古墳・貝塚

① 風土記の時代

霞ヶ浦の岸辺には、たくさんの貝塚(昔の人が捨てた貝がらが集まっている所)が残されており、その数は関東地方全体の約30%といわれています。これは縄文時代の霞ヶ浦で、たくさんの魚や貝がとれ、その岸辺には、たくさんの人が霞ヶ浦の周辺に住んでいたことをわかります。約1300年前の800年代に書かれた「常陸国風土記」という物語には、霞ヶ浦は「流海」という名前で記録されています。風土記によると、このあたりは気温の差が少なく、一年をとおしてあたたかく、たくさんの魚がすんでいて、岸辺に住む人々は、魚をとったり塩を作ったりして生活していたとの記録が残っています。

②水運の発達とおとろえ(江戸時代から昭和の中ごろ)

江戸時代に入り、利根川の流
れを変える工事などによって、
1700年代の中ごろになると、江戸
(今の東京)と霞ヶ浦の間は、船で
行くことができるようになりました。
江戸時代の初めのころは、
太平洋を利用した東北地方と江戸
を結ぶ航路(船の通り道)はあまり
使われていなかったため、
東北地方の米やものは那珂湊(今
のひたちなか市)で船につみかえ
られ、涸沼をとったり、陸路を



主な水運ルート

とおったりして北浦に向かい、高瀬船で
利根川、江戸川をとって江戸に運ばれ
ていました。

その時の米やものの中継地であった
茨城町、銚田市、小美玉市、潮来市など
では米やものを運ぶ産業が栄えました。

土浦からも米、まきなどのほか、名産のしょう油が、船で霞ヶ浦をとって江戸に運ばれました。

明治時代に入り、それまでの高瀬船にかわり、東京と高浜(石岡市)との間
で蒸気船が使われるようになり、これをきっかけにたくさんの航路ができる
ようになりました。そのころは鉄道や道路ができていなかったため、この水運
が大切な交通でした。しかし、1900年代のおわりごろには、常磐線などの鉄道
が走るようになり、自動車がふえてくると、水運はだんだん使われなくなり、
1970年代にはすべての航路がなくなりました。



高瀬船

③霞ヶ浦の漁業と帆曳船の発明

漁業は江戸時代にも行われていました。幕府と水戸藩は2カ所の禁漁区（漁をしてはいけない場所）を決めていました。さらに岸边にあった48の村の代表者たちが、霞ヶ浦の魚をとりすぎないようにしていました。



帆曳船

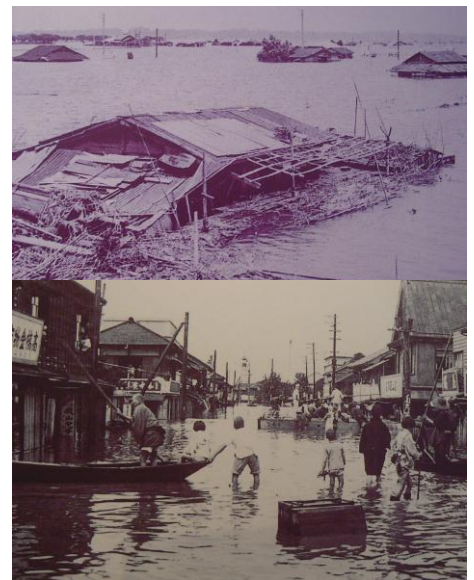
その後、明治時代に入り1880年代に帆曳船が発明されました。シラウオ、ワカサギの帆曳網漁がはじまり、魚のとれる量が増えました。

④干拓と農地の拡大

大正時代になると、霞ヶ浦の岸边の干拓事業（水をぬいて農地にすること）がさかんに行われました。昭和48年（1973年）までには約27km²が干拓されました。しかし、大正時代に近代的な揚水施設（水をくみあげる施設）が作られるまで、霞ヶ浦の水は、岸边のほんの一部の地域でしか利用できませんでした。その他の地域では、水田の水は、ため池、小さな川、わき水にたよっていました。また池も川もないところでは、雨水にたよるしかありませんでした。この時代の岸边の農民は、雨がふれば洪水（湖の水があふれること）、ふらないとかんばつ（水不足）の被害にあい、米は三年に一度ぐらいしかとれないというひどい状況が長く続きました。

⑤洪水の発生

利根川の流れを変える工事により、霞ヶ浦は、遊水池のような地形になりました。そのため大雨がふると、霞ヶ浦に入りこむ川の水があふれたり、霞ヶ浦から水が逆流したりするなどの水害に、何度もあいました。一ヶ月以上も水が引かないこともありました。このため、明治33年（1900年）から、川から水があふれないようにする工事が行われたにもかかわらず、昭和13年（1938年）、昭和16年（1941年）には、大洪水が発生しました。洪水が起こらないようになることが、周辺の人々の願いでした。



昭和13年の洪水

* その他学習資料 ウェブページ

霞ヶ浦河川事務所・美浦村文化財センター・かすみがうら市郷土資料館